
誰かが誰かの為に生きられた陳腐な物語

いとうこう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰かが誰かの為に生きられた陳腐な物語

【Nコード】

N1236V

【作者名】

いとつじ

【あらすじ】

主人公・藤崎は自分の人生は成功だと信じて疑わない。その理由は妻や娘の為に生きてきた人生を誇りに思っているからである。藤崎と妻の出会いひとつの奇跡が生んだ出来事だった。藤崎はそれを神様の贈り物だと信じている。

この物語はその奇跡を紐解く陳腐なストーリー。

藤崎の人生

「紹介したい人がいるの」藤崎は娘からそう言われた。

『ついにこのときが来たか』という思いだった。嬉しさもあるが、寂しさもある。妻と娘は藤崎にとって生きる希望だった。この2人がいなかったら自分は辛い仕事には耐えることはできなかっただろう。2人がいつも笑って生活をできるようにと30年以上も働いてきたのだ。しかし、娘ももう立派な年頃だし、もう少し経てば婚期を逃したと呼ばれてもおかしくない歳である。でも、1人娘の結婚はやっぱり寂しかった。

藤崎は階段を降りて冷蔵庫からお茶を取り出してコップに注いだ。

眠れなかった。娘の彼氏に会うというのは、少し緊張する。コップを持って椅子に座ると階段を降りる音が聞こえてきた。

「あら、まだ起きていたの？」妻が少し驚いた顔をする。

「ちよつと眠れなくてね。」コップのお茶を飲みながら答える。

「ふっふふ。あなたらしいわね。あの子のこと考えていたんでしょ？」妻は悪戯な笑顔を見せて言う。付き合う前は愛想の悪い女の子だったけど、付き合い始めたらよく笑う子だということを知った。

最初は愛想の悪いのも1つの彼女の魅力だと思っていた。笑顔の彼女ももちろん素敵だし、彼女が始め見せた笑顔は、そのときに藤崎は生涯忘れられないだろうと思うぐらい素敵だった。しかし、何故か藤崎が好きになったのは愛想の悪い彼女だった。妻も冷蔵庫を開けてお茶を取り出してコップに注ぎ始めた。

「なあ、お前は寂しくならないのか？」

「寂しいけどしょうがないでしょ。それに嫁の見つかり手がないよリマシよ。もつと喜びましようよ。」彼女はお茶の入ったコップを持ちながら藤崎の隣に座り笑った。やっぱり、父親と母親では娘に対する愛情というものが少し違うものなのだと藤崎はこの年になって理解した。しかし、それ以上に彼女がこんなに笑う人ことにあるの

頃は全く想像ができなかった。

また、階段の降りる音がした。娘が降りてきた。

「あれ、2人揃ってどうしたの？」娘もそう言うのと冷蔵庫を開けてコップにお茶を注ぎ始めた。そして、お茶の入ったコップを持って2人の座る向かい側に座った。

「ねえ、明日だけ大丈夫？」娘が心配そうに訊いてきた。

「大丈夫って何がさ。」藤崎が答える。

「いや、その・・・結婚とか認めるとか認めないとか？」娘は返答に困りながら少し躊躇ってから訊いた。

「それは彼しだいさ。」藤崎は少し意地悪に答える。

「大丈夫よ。お父さんは自分が苦労したからって、意地悪になっていただけよ。」隣に座る妻が茶々を入れる。

「なーんだ。」と一言安堵する言葉を漏らし「小さい時言われなかった。やられて嫌なことは人にするなって。」娘は開き直たように言う。

「そうだよ。人にやられて嫌なことはぜ〜りたいに人にしては駄目なの。」妻も聞えよがしに大袈裟に言った。男は藤崎だけなので家庭の会話は藤崎が劣勢になることはいつものことだった。しかし、こんな会話ももうすぐできなくなると思うと、やっぱり寂しい。

「ねえ、そういえばお父さんとお母さんの馴れ初めとか教えてよ。」娘が興味津津という顔で訊ねてきた。娘に妻へのプロポーズの言葉などは聞かれたことはあったが出会いについて聞かれるのは初めてだった。

「馴れ初めかあ。」妻が隣で遠い過去を見つめている。

「そうだな、奇跡が起きたのかな。」藤崎が答えた。

「何それ？ ロマンチックな話？」娘が目を輝かせた。

「う〜ん、どうだろうね。ロマンチックだったら、白馬の王子様でも現れるんだろうけどね、現れたのがねえ。」妻が隣にいる藤崎を見て意味あり気に言う。

「白馬の王子じゃなくて、・・・なんだったの？」娘が悪戯な笑み

を浮かべた。

「泥だらけのヒーローって感じかな。しかも、弱いのに。」妻ががつくりと頭を落しながら言った。しかし、藤崎には何も言い返す言葉が見つからない。

「でもね、それでも格好良かったんだ。」妻が娘に自慢するように言う。娘は「へえ」と藤崎を見ながら意味深に言葉を漏らす。その視線は「このお父さんがねえ」とでも言いたげだ。

「だからあなたもいい人連れてきなさいよ。」妻が娘にビシツと言うと「絶対大丈夫」と娘も強く返した。それからしばらく家族の会話は盛り上がった。

藤崎は部屋に戻ると1本のバットを手を取った。このバットが妻と自分を結び付けてくれた物だと藤崎は考えている。あれは奇跡だった。でも、あの奇跡は今考えても何だったのかわからない。でも、藤崎はあの奇跡は神がきつと自分に与えてくれた希望だと感謝していた。

藤崎の選択

しまった寝過ぎた。藤崎は起きた時に寝過ぎたことを後悔した。時計の針は6時を示している。昨日は朝早くから来年から勤める会社の内定式に出席して、夕方に帰ってから中学からの友達から飲みに行こうという誘いに乗って朝日が出るまで遊んでいたのである。寝る前の自分の記憶に間違いがなければ12時間以上寝たということになる。だが、まだ眠い。しかし、これ以上寝ても取れる疲れはなく、逆に疲れてしまうと判断した藤崎は部屋から出て夕飯を食べることにした。夕飯を食べながらテレビを点けるとスポーツニュースがやってきた。藤崎の贖身する球団は現在3連覇中で今年の前半戦は好調だった。前半戦を折り返した時には2位に5ゲーム差以上つけていて間違いなく優勝すると思われていた。しかし、後半戦が始まった途端に自慢の投手陣が打ち込まれるというケースが相次ぎ、リーグが終了したら首位と最大15ゲーム離されていた球団の優勝が昨夜に決まっていた。藤崎のひいきする球団は3位に甘んじていた。テレビでは奇跡のドラマと世間を騒ぎ立てているが、藤崎にはそんな奇跡は不快な出来事としか思えなかった。もちろん、そんなニュースは藤崎にとってはつまらないので、すぐにテレビを消した。なんだか、つまらない1日になる予感がした。

夕飯を食べ終わると、1日をどう過ごすか考えた。時計を見ると6時35分を示している。今夜はおそらく眠むれないだろう。明日は朝からバイトだ。藤崎は朝までDVDを見て過ごすのが一番の無難な選択であると考えた。そう思った藤崎は昨日は風呂に入らないで寝てしまったことに気付き風呂に入ってから出かけることにした。

ファニーの近況

ファニーは世間で言われている『ニート』と呼ばれるものから『フリーター』と呼ばれるものに昇格していた。昇格という言葉が正しいのかはわからないが、あの事件後から週4日で働き、自給700円と決して高くはないがニートをしていたときよりも充実した生活を送っている。

しかし、ファニーの働くコンビニにスピードが現れたのは3日前のことだった。

「いらつしゃいませ。お預かりします。」作り笑いを浮かべて対応する。

「いらしゃってやったよ。それよりも聞けよ。新しい奇跡を見つけたんた。」スピードは嬉しそうに言った。

「へえ、そうなんだ。」あからさまな棒読みにも関わらずにも「そうなんだよ。」とスピードは目を輝かせ続ける。

「それでな、3日後に『奇跡起こし隊』の活動をするんだ。」

「・・・駄目だ。3日後はバイトなんだ。」ファニーは首を横に振った。

「だから、詳細は後で連絡するから空けておいてくれ。」スピードはファニーの言う事を取り合わずに勝手に話を進める。

「いや、だから無理なんだって。」ファニーは少し刺々しい言い方をしたがスピードはお金を払い「釣りはいらねえよ。そこに募金しといてくれ。」と言って颯爽と帰って行った。ファニーはレジ処理を済ませ、余った2円を募金箱に入れた。

ファニーのバイト先は市街地から少し離れた位置にある。そのせいもあって時間帯によっては1時間に客が1人も来ない日もあるぐらに客のこないコンビニであった。このコンビニをバイト先に選んだのも客が来なさそうで楽ができそうだからだった。

しかし、市街地から離れていることもあってバイト先まで自転車

で20分以上掛るのがファニーにとっての1番の苦痛だった。また、暇なせいでスピードがバイト中に平気で話し掛けてきたのかと思うと皮肉な事だと思った。だが、すぐにファニーは首を振る。スピードならピーク中の1番忙しいときでも平気で話し掛けてくるだろう。スピードという人間はそうゆう人間なのだ。平気で他人を振り回し、言いたいことは言つて、やりたい事はなんでもやる。でも、そうゆうスピードが少し羨ましいとも思う。『奇跡起こし隊』は大仰に言う、世間を騒ぎ立てて奇跡を起こし、人々を感動させようという集団である。決して『愉快犯起こし隊』ではない。

「ずいぶん楽しそうだったね。」かつらオーナーが嫌みなのか本音なのかわからないが気色悪い笑顔で言ってきた。かつらオーナーはオーナーの名字が『桂』だからではなく、かつらを被っているからかつらオーナーなのである。つまり、彼の事をよく思わない誰かが彼がかつらを被っていることを揶揄した陰のあだ名である。

「いえ、そんなに楽しくないですよ。」押し掛けられてしょうがなく相手をしていただけなので少しも楽しくはなかった。

「そうか。でもね、お客様にはそれが遊んでいるように見えるときもあるんだ。僕は君にお金を払っているんだよ。つまり、君にはそれ相応の仕事してもらわなければならぬんだ。」かつらオーナーは気色悪い顔で正論を言う。そんなことは百も承知だが、周囲を見ても客はいないし、今日すべき仕事は終えている。かつらオーナーだってさつきまで「客がこないし今日の仕事はもう終わりかな。」とぼやいていた所だった。そんな皮肉を言うためにわざわざ店長室から出てきたのかと思うとファニーが心から呆れた。だが、わざわざ店長室から出てきてもらったので、ファニーは駄目もと3日後のシフトの件を聞いてみた。

「あの、3日後の僕のシフトどうなっていますか？」少し遠慮気味に訊く。スピードにはバイトがあると言ったが実際にはかつらオーナーが作るシフトは遅く3日後のシフトがまだできていなかった。このバイト先ではそんなことが平気である。

「うーん・・・そうだな。じゃあ、13〜22時ということだ。予想通りの答えだった。ファニーの理想は『何か用事でもあるのかい?』とこっちの雰囲気を読み取って、気に掛けてくれる心遣いが欲しかった。だが、かつらオーナーはそれができない。あえてしない相だなひねくれ者なのか、人を困らせることを生き甲斐に生きているのか、それとも人が足りなくてかつらオーナーも困っているのか、ファニーにはわからない。だが、ファニーの理想の答えとは違った。ファニーはあまり人を見下すことはないが、かつらオーナーは駄目人間だと思っている。当然、言わずもがななことだが、このかつらオーナーはこの店の従業員から人気がない。ファニーが初めて出勤した時に交代で入った深夜の店員が教えてくれたことが、オーナーがかつらということだった。それだけではない。100歩譲って従業員から嫌われることは仕方がない。オーナーとはそういう職業でもある。それぐらいファニーにだってわかる。だが、かつらオーナーは客にも嫌われることが多いのだ。ファニーはかつらオーナーが若いやんちゃな客と喧嘩をしているのを見たことがあった。「てめえ、店員だろ。」とかつらオーナーは睨まれていた。呆れられていた。かつらオーナーが作った唐揚げをその客はお金を払ったにも関わらず「こんなもんいるか。」と吐き捨てて出て行った。受け取らなかつた。かつらオーナーの接客態度の悪さに客が激怒したのだ。

ファニーはなにがあつたのか知らないが「はい、お客さん唐揚げが出来ましたよ。」とレジの上に唐揚げを置いたのを見た。謝つたんだからそれでいいでしょ。あれと同じだ。誠意に欠けた言い方だった。マニュアルはお客様を呼び出して手渡しするのだが、かつらオーナーはレジの上に置いたのだ。どういった、いざこざがあつたのか知らないが、お客様最優先というスローガンをかつらオーナーは実行していなかつた。それに、客は激怒した。

「最近の若い奴はわからないね。この辺治安が悪いし。ああいう奴だけには君もなるなよ。」

かつらオーナーは苦虫を噛み潰したような顔で言った。ファニーはそのとき、この人は駄目だ、と心から残念に思った。そして、店の売り上げが悪いのもこの人がオーナーだからじゃないのか、と勘繰った。

「すみません。申し訳ないんですが急用ができたので休ませてもらえませんか？」ファニーが謝って懇願する。

「駄目だ。用事があつたら×印をつけるのがルールだろ。1度決まったシフトぐらい出てくれなければ困るよ。ルールなんだから。」
「決まったと言つても、今さっき決めたんじゃなくと指摘したくなるのを堪えてもう1度頼む。」

「すみません。それはわかっているんですけど、急用なんですよ。」
「駄目だよ。ルールなんだから。」かつらオーナーはルールという言葉で強調する。しかし、ファニーにだつて秘策はあつた。

「わかりました。じゃあ、僕は今日で辞めます。」ファニーは言い切つた。元々、自給は安いし、オーナーは最悪な人間だし、家からは離れているし、このバイト先にこだわる理由は何もなかった。むしろ、バイト先を変えた方がいいかもしれないというのが頭の片隅にあつた。丁度良い機会だつた。

しかし、かつらオーナーの顔があからさまに変わった。

「どうして最近の若者はすぐに辞めるとか、根性のない奴が多いんだ。ルールの1つも守れやしない。すぐに辛いことがあつたら逃げろ。そんなのじゃ社会に出たって通用しないぞ。」かつらオーナーは顔を真っ赤にして声を荒げて言った。ファニーは「すみません。」と一言だけ謝つて頭を下げた。すると、かつらオーナーは「今回だけは大目に見てやる」と言い出した。「今回だけだからな。次からは×を付けるだぞ。」
「そう言い残すと勇ましい背中を見せて休憩室へと入つて行つた。」

別に大目に見てもらわなくてもいいとは言わなかつた。ここを辞めて新しいバイト先を探しても良かったのだが、この店がかつらオーナーの人格のせいで新しいバイトは長続きせず、まだ入つて3カ

月のファニーも貴重な戦力だった。ファニーに辞められたら困るのがこの店の現状であった。ファニーもそのことを理解した上での秘策であったので、無理にこの店を辞めるとは言わなかった。また、ファニー自身も自分が必要とされるのは嬉しいことだった。しかし、かつらオーナーはあれだけ自分では偉そうなことを言っているのにバイトに頭一つ下げて「辞めないでくれ」と言えないのかと、さらに呆れた。

そして昨日、バイトから帰るとスピードから電話があり、夜の7時45分までにバス停前公園のバス停の前に来てくれ、と連絡があった。どうしてこの間は電話ではなかったのか、と思ったが了承しやすく電話を切った。

ファニーが起きると夕方の4時だった。しばらくバイトが続いていたせいもあって、スピードの電話を切った後にテレビの自動録画で溜め込んでおいた番組を夜遅くまで見ていたせいである。起きて食卓テーブルに座りご飯を食べようと思ったが、これは遅い昼飯なのか早い夜飯なのかと、くだらないことを考えていると時間は5時になっていた。5時になれば、自分の中ではもう夜飯なので答えは見つかり、夜飯を食べた。

スピードとの約束の時間まで少しテレビでも見ようと点けるとテレビのニュースで野球が取り上げられていた。どうやら、首位に大差で離されていた球団が奇跡のドラマを起こし、見事にリーグ優勝したらしい。奇跡を先に起こされてしまったなと思いつつしばらくスポーツニュースを見ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1236v/>

誰かが誰かの為に生きられた陳腐な物語

2011年7月24日03時15分発行